

修士論文概要

J S L 児童に対する漢字指導研究

日本語能力の向上を目指した内容重視のアプローチを通じて

武蔵 祐子

本論は、筆者が日本語指導ボランティアとして JSL 児童の日本語指導に携わるなかで抱えた課題を解決するべく試行錯誤した研究、実践に基づくものである。

第 1 章 問題の所在

第 1 章では、筆者が日本語支援の現場で抱えていた JSL 児童の漢字習得という問題に焦点をあて、JSL 児童の漢字習得におけるつまずきがどこにあるのかを探った。

筆者が S 区で日本語支援をおこなう児童 A の事例から、まだ日本語として理解していないことばに対して漢字が導入される場合、漢字の「字音」と「字義」のもととなる部分が獲得されていないため、漢字の「字形・字音・字義」が結びつかず定着しないことが明らかになった。

そこで、そのような現状を踏まえ、児童が既に知っていることば、すなわち児童が既に漢字の「字音・字義」にあたる部分を理解していると考えられることばを中心に漢字指導をおこない、児童の身近なことばから漢字指導をおこなう漢字指導実践 をおこなった。この実践 では、A が自分のことについて書いた、作文や感想文、発話の際に記録のために箇条書きしたメモなどをもとに、その中の仮名書きした部分に「書けなくてもいいから漢字があるもの、または、知らないけれど漢字があるかもしれないと思うもの」に線を引き、その部分を一緒に漢字に直していくという作業を通し漢字を導入した。

その結果、次の 4 点において変化が見られた。

学習負担軽減の効果

自己モニター能力の効果

漢字を「書く」ためのストラテジー使用の効果

漢字に対する分析力の効果

この漢字指導実践 から、学習者が実際に使用したり理解したりできることばであれば、すなわち、「字音」と「字義」のもととなる部分が獲得されていれば、そのことばに漢字を導入し学習させることは比較的效果のある指導法となるとことが明らかになった。

しかし一方で、「字義と字音があるところへ字形を導入する」という表現からも明らか

ように、「文字としての漢字指導」という側面が強い指導でもあった。すなわち、JSL 児童がその理解できることばを獲得していく過程やそのための指導という視点を欠いた指導実践であったともいえる。日本語指導者として JSL 児童の日本語支援に関わる以上、そのような学習者が理解できることばや使用できることばを獲得していく過程を大切にすべきであり、また、日本語能力全体の向上を図っていくような指導と並行してこそ、学習者が漢字を学習する環境を整え、かつ効果的に漢字を学習することができるのではないかと考える。筆者が行った漢字存在感覚を意識した漢字指導実践 を評価しつつ、漢字を使ってどのようなことができるようになることを望むのかという視点を大事にし、漢字を実際に使用していくために必要となる日本語能力の育成を図る漢字指導、すなわち「総合的な日本語能力の向上を図る日本語指導と合わせた漢字指導」を提案した。

第2章 国語科教育における漢字指導

第2章では、JSL 児童が漢字を学習し、漢字を使って学習する場である学校教育現場では、日本語母語児童に対しどのような漢字指導がおこなわれているのかを分析し、JSL 児童の漢字指導で配慮すべき点を明らかにした。

この分析から、日本語母語児童の漢字指導では、漢字は「学年別漢字配当表」により児童に配慮された形で提示され、児童は教科書という文脈、そして既習の漢字と新出の漢字のみで構成された教科書に支えられ漢字学習を進めていることが明らかになった。日本語母語児童の漢字指導においては「文字としての漢字指導」という側面が強い漢字指導がおこなわれているが、近年では「語彙・語句としての漢字指導」の必要性が叫ばれている。

筆者の提案する「総合的な日本語能力の向上を図る日本語指導と合わせた漢字指導」は、この「語彙・語句としての漢字指導」を含むが、より日本語の獲得・理解を視野に入れた指導法であるといえる。

第3章 日本語指導と漢字指導における認知心理学からの知見

ここでは、筆者の提案する「総合的な日本語能力の向上を図る日本語指導と合わせた漢字指導」を「日本語指導」という側面と「漢字指導」という側面にわけ、それぞれ認知的心理学的知見を利用し、ことばを獲得するということ、漢字を学習するということについてそのメカニズムや重要な要素を探った。

その結果、ことばに質的・量的な情報を付加することにより効率的な記憶を促す「精

緻化」という概念が利用できるのではないかと考えた。「精緻化」の効果を得るためには、ことばや語彙や漢字を意味のある活動の中で使い、ことば同士、量的にも質的にも有効な情報が付加された「精緻化」された状態を作り、その中でことばや漢字を学習することが有効ではないかと考える。このような考えの元、児童が意味のある活動を通じてことばや概念、漢字を学習するためにはどのような方法、アプローチが考えられるのか、その指導方法について第4章で扱った。

第4章 JSL 児童に対する内容重視の漢字指導の提案

3章の認知心理学的知見を受け、意味のある活動を通じてことばや概念、漢字を学習することが日本語習得、漢字習得において効果があることがわかった。そして、4章ではその指導方法として内容重視のアプローチを検討した。

内容重視のアプローチからは、テーマの選択、授業展開、評価について多くの知見を得た。テーマに関しては、「それまで、子どもたちが母語で培ってきた『学ぶ力』に応じて、その子どもたちが興味と知的な緊張感をもって取り組むことのできるトピックと活動を用意しなければならない」という「トピック型」のJSLカリキュラムのトピックの選択方法を参考にし、授業展開については、「トピック型」JSLカリキュラムに見られるような、言語を「体験」「探求」「発信」という言語機能に分類し、それぞれの言語機能を伴う活動を組み込みながら授業の展開を考えるという考え方と、Cummins & Swain (1996)の文脈への依存度と認知力の必要度から必要とされる言語力をもとに学習者の学習負担や学習困難な点を配慮し授業を展開する考え方を参考にした。また、評価に関しては評価のある到達目標に対して「できた・できなかった」という評価ではなく「一人一人の子どもたちの実態に応じて次の学習課題を提示するための評価」という視点を採用した。

以上の知見を踏まえ、5章の漢字指導実践をおこなった。

第5章 JSL 児童に対する内容重視の漢字指導実践

4章で得た知見をもとに漢字指導実践をおこなった。

主な授業の展開としては、一つのテーマを複数時間かけ各テーマに関する概念を「体験」「探求」「発信」「振り返り」の4つの作業を盛り込むことで理解し、定着させるように努めた。また、Cummins & Swainの4象限のA象限からD象限へと向かうように展開すること、および、学習内容だけでなく言語項目にも注意を払えるよう、読み書きを多く取り

入れた活動をおこなうことを心がけた。

このような授業展開の中で、理解できることばを増やしながらか漢字を導入し、漢字の習得によりさらに学習内容の理解を深めることを目指した。

この実践の成果については、「日本語指導」としての側面、「漢字指導」としての側面、そして「概念の広がり」と定着」「授業態度、意欲」という四つの観点に分けて分析をおこなった。

その結果、「漢字指導」の観点からの分析では、次の6点において変化がみられた。

- 1) 調べたり、まとめたりする作業の中で、自然に漢字を書き写したり、読んだりし、活動の中で自然に漢字を習得する様子が伺えた。
- 2) 漢字を通して、意味のつながりを実感することができた。
- 3) どのような部分に漢字が使われているのか、漢字に対して分析的になった。
- 4) 漢字を自分で部品にわけ、字形の習得を工夫していた。
- 5) 既習の漢字や文脈から漢字の読みや意味を推測する様子が観察された。
- 6) 練習する漢字を自分で選ばせることで、自分が学習している内容から、どの漢字を勉強すれば自分にプラスになるのかを、考えたり、自分の生活と漢字を関係付けたりすることができた。

「日本語指導」の観点からの分析では、以下の3点において変化がみられた。

- 7) 書く活動を多く取り入れたことで、児童の書字の際の誤用の癖などの把握ができるようになり、児童自身に意識させることができた。
- 8) 自分の表現したいことを日本語で表現する力がついた。
- 9) 相手を意識した日本語の使用へ 文末表現を意識した文章へ

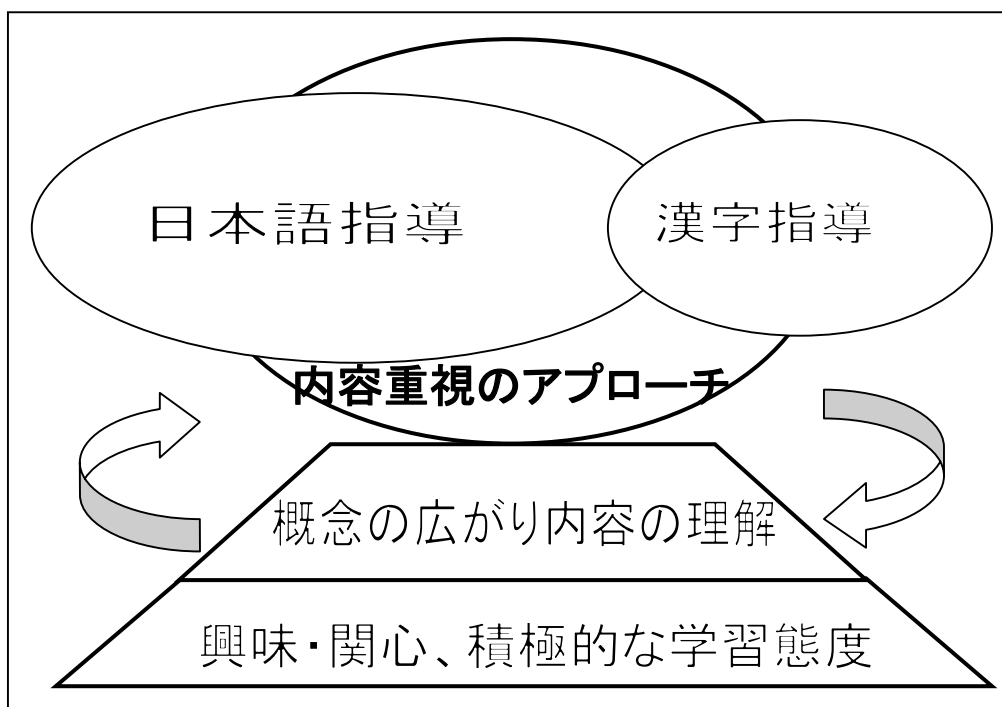
また、「概念の広がり」と定着」「授業態度・意欲」においても効果がみられた。実践の分析としては、Bourke(2004)の漢字学習ストラテジーの使用とJSLバンドスケール(川上2004)による日本語能力の測定からも分析をおこなった。

漢字学習ストラテジーの使用においては、本実践によりさまざまな漢字学習ストラテジーの使用がみられ、さまざまな感覚や方法を用いた漢字習得が組み込まれていることが明らかになった。

JSLバンドスケールによる日本語能力の測定から、日本語能力においても順調に伸長していることがうかがえた。

第6章 考察

ここでは、5章の実践の成果について考察し、内容重視のアプローチによる実践が以下のような関係のもとに成り立っていることを明らかにした。



第6章 まとめと今後の課題

7章では本論の総括をおこない、今後の課題として以下の4点を提示した。

漢字指導を全く受けたことのないJSL児童に対する初期の漢字指導を考えること。

異年齢の児童に対する実践を行うことで、JSL児童の年齢や認知的社会的な発達の違いに応じた漢字習得について研究し、年齢や認知的社会的な発達の違いに応じた漢字指導を提示すること。

筆者の提案する質的な漢字指導と、その一方で求められる量的な漢字指導がその育成を目指す能力の違いやその二つの指導の関係などについて研究し、質的な漢字指導と量的な漢字指導の二つのアプローチによりJSL児童の漢字習得を支援していく環境を整えること。

「総合的な日本語能力の向上を図る日本語指導とあわせた漢字指導」を継続し、この実践で育成した力が、在籍学級での「学び」にどのようにつながっているのかを明らかにすること。

<参考文献>

- 池上摩希子(1998)「児童生徒に対する日本語教育の課題・再検討 研究ノート」『中国帰国者定着促進センター紀要』6.
- (1999)「実践報告 センター小学生低学年クラスにおける算数プログラムの設計」『中国帰国者定着促進センター紀要』7.
- 石井恵理子(1998)「非母語話者に対する漢字教育」『日本語学』17-5.
- 石田敏子(1989)「漢字の指導法(非漢字系)」『日本語の文字・表記(下)』(講座日本語と日本語教育9)サイエンス社.
- 伊藤寛子・和田裕一(1999)「外国人の漢字の記憶検索における手がかり - 自由放出法を用いた検討 - 」『教育心理学研究』47-3.
- 井上一郎(2001)「漢字力の明確化と指導」『教育科学 国語教育』8.
- 今井靖(1978)[幼児の文字の読み]『子どもの心理学 2 幼児のことば』.
- 上田晃(2000)「語彙を強く意識した漢字指導」『月刊国語教育』11.
- 王晋民(1988)「漢字の音韻処理と意味処理は同時に完了するか」『心理学研究』59-4.
- 王伸子(1990)「日本語学習における学習ストラテジーの考察 ある学習者にみる新出単語記憶方法の観察」『名古屋大学日本語学科日本語教育論集』1.
- 大久保忠利(1986)『漢字と教育』一光社.
- (1992)『国語教育 話しコトバ・作文・漢字・文法』三省堂.
- 大北葉子(1995)「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」『世界の日本語教育』5 国際交流基金日本語国際センター.
- (1998)「初級教科書の漢字学習ストラテジー使用及び漢字学習信念に与える影響」『世界の日本語教育』8 国際交流基金日本語国際センター.
- 岡崎眸(1994)「内容重視の日本語教育 大学の場合」『東京外国語大学論集』49.
- オックスフォード, レベッカ・L(1994)『言語学習ストラテジー』凡人社.
- 甲斐睦朗(1989)「語彙指導」『日本語の語彙・意味(下)』(講座日本語と日本語教育7)サイエンス社.
- カイザー・シュテファン(2000)「非漢字圏日本語学習者のための漢字・語彙教育のシラバスに関する考察 - 認知心理学実験の知見を踏まえて - 」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15 筑波大学留学生センター.
- 海保博之(2001)「非漢字圏日本語学習者に対する効果的な漢字学習についての認知心理学

- からの提言」『筑波大学心理学研究』筑波大学心理学系．
(1984)『漢字を科学する』有斐閣．
- 海保博之・野村幸正(1983)『漢字情報処理の心理学』教育出版．
- 加納千恵子(1996a)「非漢字圏学習者の漢字力の発達過程を評価する試み」『日本語教育方法研究会誌』3-1．
(1996b)「漢字学習の方法と評価」『日本語教育方法研究会誌』3-2．
(2000)「中上級学習者に対する漢字語彙教育の方法」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』15 筑波大学留学生センター．
- 加納千恵子・清水百合・竹中弘子・阿久津智・石井恵理子・海保博之・出口毅(1989)「自由放法による外国人の漢字知識の分析」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』4．
- 神谷俊次(1984)「精緻化が単語の保持に及ぼす効果」『心理学研究』55-3．
- 川上郁雄(2003a)「年少者日本語教育における『日本語能力測定』に関する観点と方法」『早稲田日本語教育研究』2．
(2003b)「年少者日本語学習者の日本語能力測定の方法」『2003年度日本語教育学会秋季大会予稿集』．
(2004)『JSL バンドスケール 2004年試行版・小学校編』早稲田大学大学院日本語教育研究科．
- 川口義一(1988)「漢字指導の新しい試み」『講座 日本語教育』24 早稲田大学日本語教育研究センター．
(1993)「コミュニケーション・アプローチの漢字指導」『日本語教育』80．
- 川崎恵里子(1995)「第6章 長期記憶 知識の構造」『認知心理学2 記憶』東京大学出版．
- 川本喬(1977)「漢字の多面性と指導」『講座 日本語教育』早稲田大学語学教育研究所．
- 北尾倫彦・金子由美子(1981)「子どもの偶発記憶と処理様式に関する発達的研究」『教育心理学研究』29．
- 清田淳子(2001)「教科としての『国語』と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み」『日本語教育』111．
- 桐村雅彦(1995)「第7章 長期記憶 想起と忘却」『認知心理学2 記憶』東京大学出版．
- 久米公(1989)『新訂 漢字指導の手引き』教育出版．

- 黒坂文男(2000)「確かな力をつける漢字・語彙指導をめざして」『月刊国語教育』11.
- 国立国語研究所(1988)『児童生徒の常用漢字の習得』東京書籍.
- (1994)『常用漢字の習得と指導』東京書籍.
- 小林茂(1998)「これからの漢字教育の考え方」『日本語学』17-5.
- 小林由子(1995)「教室における漢字学習活動 - 非漢字圏学習者のための初級漢字補習クラスを対象として - 」『日本語教育方法研究会誌』2-1.
- (1996a)「漢字学習活動の分類」『日本語教育方法研究会誌』3-1.
- (1996b)「中上級を対象とした『自立的な』漢字授業の一試案」『日本語教育方法研究会誌』3-2.
- (1997a)「漢字学習活動の分類(2)」『日本語教育方法研究会誌』4-1.
- (1997b)「単語レベルの漢字書き練習の分析」『日本語教育方法研究会誌』4-2.
- (1998a)「単語レベルにおける漢字読み課題の誤用」『日本語教育方法研究会誌』5-1.
- (1998b)「漢字授業における学習活動 - 認知心理学的モデルによる検討 - 」『北海道大学留学センター紀要』2.
- (2001)「第1章 認知心理学的視点」『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社.
- 五味貴久子(2000)「辞書を活用させる漢字・語彙指導」『月刊国語教育』11.
- 齋藤ひろみ(1998)「内容重視の日本語教育の試み 小学校中高学年の子どもクラスにおける実践報告」『中国帰国者定着促進センター紀要』6.
- (1999)「教科と日本語の統合教育の可能性 内容重視のアプローチを年少者日本語教育へどのように応用するか」『中国帰国者定着促進センター紀要』7.
- (2000)「帰国児童・生徒クラスの『日本語と教科の統合学習』における教室会話の分析」『中国帰国者定着促進センター紀要』8.
- (2001)「『学習』を支える日本語能力の育成に向けて」『世界をひらく教育』23.
- 齋藤ひろみ・池上摩希子・田中義栄・小川珠子・大沢操子(2000)「子どもクラス授業実践記録 内容重視のアプローチによる『日本語と教科の統合学習』の例」『中国帰国者定着促進センター紀要』8.
- 佐々木正人(1984)「『空書』行動の発達 - その出現年齢と機能の分化 - 」『教育心理学研究』32-1.

- (1990)「からだの記憶」『言語』19-1 .
- 佐々木正人・渡辺章(1983)「『空書』行動の出現と機能 - 表象の運動感覚的な成分について - 」『教育心理学研究』31-4 .
- 清水寛之(1995)「第8章 記憶力」『認知心理学2 記憶』東京大学出版 .
- 下村昇(1994)『小学国語学習辞典』偕成社 .
- (2003b)『みんなの漢字教室』PHP新書 .
- (2003a)『文字に強いこどもはことばに強くなる』自由国民社 .
- 関口明子(1994)「日本定住児童の日本語教育 インドシナ難民児童の多様な言語背景と日本語習得」『日本語教育』83 .
- 高橋裕子(1993)「非漢字系日本語学習者の漢字学習者に関する実証的研究(1) - 自由放法による初級レベルでの検証 - 」『研究論集』57 関西外国語大学短期大学部 .
- 高橋雅延(1986)「生成効果の解釈をめぐる問題」『心理学評論』29-2 .
- 武部良明(1978)「漢字の読み方について」『講座 日本語教育』15 早稲田大学語学教育研究所 .
- (1982)「漢字の意味について」『講座 日本語教育』18 早稲田大学語学教育研究所 .
- (1983)「漢字の覚え方について」『講座 日本語教育』19 早稲田大学語学教育研究所 .
- (1984)「漢字の単位について」『講座 日本語教育』20 早稲田大学語学教育研究所 .
- (1989)『漢字の教え方 日本語を学ぶ非漢字系外国人のために』アルク .
- 棚橋尚子(1998)「小学校における漢字教育の現状と問題点」『日本語学』17-5 .
- 玉岡賀津雄(1994)「仮名と漢字による語彙処理のメカニズム - 日本語学習者の学習歴と言語背景による影響 - 」『松山大学総合研究所所報』15 松山大学総合研究所 .
- 玉村文郎(1993)「日本語における漢字 その特質と教育」『日本語教育』80 .
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター(1998)『外国人児童生徒のための日本語指導<第2分冊> - 算数(数学)・理科の教科書 - 語彙と漢字 - 』ぎょうせい .
- 徳弘康代(2003)「漢字認知処理からみた効果的漢字習得法の研究 - 相互結合型概念地図作成の試み - 」『早稲田大学日本語教育研究』2 .
- 豊田弘司(1983)「子どものにおける記憶属性の発達的变化」『心理学研究』53-6 .

- (1984a)「虚再認研究の展望」『心理学評論』27-4 .
- (1984b)「子どもの精緻的学習に及ぼす文脈による意味的限定の効果」『教育心理学研究』32-2 .
- (1987)「記憶における精緻化 (elaboration) 研究の展望」『心理学評論』30-4 .
- (1990)「偶発記憶における検索に及ぼす精緻化の効果」『心理学研究』61-2 .
- (1995a)「第5章 長期記憶 情報の獲得」『認知心理学 2 記憶』東京大学出版 .
- (1995b)『記憶を促す精緻化に関する研究』風間書房 .
- 中村重穂 (1997)「日本語学習者の漢字学習ストラテジーに関する調査と考察」『日本語教育研究』33 .
- 日本教材文化財団 (2000)『生きる力が育つ漢字の学習』日本教材文化財団 .
- 縫部義憲 (1999)『入国児童のための日本語教育』スリーネットワーク .
- 花田修一 (2001)「中学校の漢字指導の留意点」『教育科学 国語教育』 .
- 伴 紀子 (1989)「日本語学習者の適用する学習ストラテジー」『アカデミック文学・語学編』47 南山大学 .
- 廣瀬 等 (1992a)「漢字の認知過程に関する研究 プライミング法による検討」『心理学研究』63 .
- (1992b)「熟語の認知に関する研究 複数の意味をもつ漢字の記憶について」『広島大学教育学部紀要』第一部 (心理学) 41 .
- 福沢周亮 (1978)「児童の語彙」『子どもの言語心理 1 児童のことば』 .
- 藤井圀彦 (2001)「適切に漢字を使うことのできる力を育てる」『教育科学 国語教育』8 .
- 本堂寛 (1988)「小学校の漢字教育」『漢字教育』(漢字講座 12) 明治書院 .
- 牧戸章 (2003)「確かな漢字指導・語句指導を求めて」『月刊国語教育』23-6 .
- 水戸部修治 (2001)「小学校の漢字指導の留意点」『教育科学 国語教育』8 .
- 文部省 (1995)『日本語を学ぼう 3』ぎょうせい .
- 文部科学省 (1998)『平成十年版小学校学習指導要領』 .
- (2003)『学校教育における JSL カリキュラムの開発について (最終報告)』文部科学省初等中等教育局国際教育課 .
- 横須賀柳子 (1999)「語彙および漢字学習ストラテジーの研究」『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版
- 吉川陽子 (2004)「非漢字圏児童の自律的漢字・漢字語彙の習得支援」南山大学修士特定研

究 <http://www.kikokusha-center.or.jp/ronbun/kakuron/29/index.html>

吉村弓子 (1989) 「漢字の指導」『日本語教授法(上)』(講座日本語と日本語教育第13)サイエンス社 .

Bourke, B. (2004) 「漢字学習者のためのストラテジーの調査 (SILK): その開発と日本語学習者への示唆」2004年11月30日早稲田大学日本語教育研究センター講演会資料

Cummins, J. and Swain, M. (1986) Bilingualism in Education. Longman.

Oxford, R. (1990) Language Learning Strategies. New York: Harper Collins.

< 参考図書等 >

『地震なんでも質問箱 地震はどうして起こるの?』アリス館 .

『地震なんでも質問箱 地震が起きたらどうするの?』アリス館 .

『動物たちのいのちの物語』小学館 .

『100年でなにが変わったか? ライト兄弟から宇宙旅行までのりもの100年』PHP研究所 .

『森を育てる漁師の話』『月刊たくさんのふしぎ』132 福音館書店 .